
こころの探索過程

罪悪感の精神分析

鈴木智美著

金剛出版, A5判 220頁, 3,960円, 2024年10月刊

(東洞院心理療法オフィス／太子道診療所) 北村婦美

本書は精神分析家であり精神科医である著者が、精神分析臨床や一般精神科臨床（外来や入院による治療）で実践してきた治療について、また著者が特に精力的に取り組んできた摂食障害の治療やその考察について伝える本である。

著者は国際精神分析学会に所属していることから予想されるように、ここで報告されている治療は、日本で一般的な週1回（45～50分／回）の精神分析的療法のみでなく、週4回で実施されるいわゆる狭義の精神分析治療を含んでいる。また治療対象は神経症圏の人ばかりでなく、境界性パーソナリティ障害をもち激しい行動化をとまなう人や、一時的な精神病状態に陥ることのある病態水準の人も含む。

本書の構成は第1部が「精神分析的邂逅」、第2部が「摂食障害を生じるこころ・パーソナリティ障害に見るこころ」、第3部が「精神科臨床における立ち位置」となっている。第1部冒頭の「無意識の迫害的罪悪感—その治療的取り扱い」は、2006年に「精神分析研究」誌に掲載された原著論文であるが、本書の副題となった「罪悪感」という主題の重要性を、最もバランスよく端的に伝えている。すなわち、無意識の迫害的罪悪感がどのように人のこころにおいて病理的な影響を及ぼしており、解離・過食・自傷・虐待およびその世代間伝達といった諸現象の背後にあるのかを、詳細な治療経過に添って説得力をもって論じている。また続く章で紹介されている治療は、週4回の期間を含むインテンシブな精神分析治療であり、終結まで実に9年1,557回を数えているが、こうした頻度での精神分析治療の実際を、全過程を通して現在これだけ詳細に学ぶ機会が得られる日本語

の書籍は貴重であろう。

第2部の摂食障害治療や、第3部の医療現場での実践においても、第1部で示された著者の基本的治療態度や、そこで目指されるものは変わっていない。陳腐な表現になってしまうが、それは症状や行動化の背後にある不安や恐怖を読み取り、そうした治療者の理解を繰り返し言葉で伝え、喪失の痛みを受け止めていくこと、そのために抱える環境を整え維持し続けることであろう。その際、著者の姿勢として特徴的に思えたのは、「防衛の解釈だけではなく、その防衛を必要とした」根底にある迫害的恐怖を理解し伝え続けようとしている点や、「解釈それ自体が迫害的に受け取られないように伝える」（いずれもp13）ために、非言語な面への気配りにも触れている点など、解釈が同時に共感を伝えるものになるようにという配慮である。また著者は、面接者が管理医を兼ねる設定や、親面接と個人面接の併用など、現場で必要になった治療構造のバリエーションを吟味の上で取り入れる柔軟さも示している。

理論を支えとして粘り強く行われてきた実践を伝える本書は、学びつつ働く現場の臨床家（評者もその一人である）への確かな励ましとなるに違いない。ぜひ一読をお薦めしたい。
